

ホトトギス

一月号

ホトトギス

昭和二十八年三月二十八日運輸省特別換水誌雑誌第六二七号
平成二十八年一月一日発行(第四百十九卷第一号)



俳句随想〔四百三〕

汀子

『花は葉に』は歳時記にはありませんが皆さん使っております。『葉桜』の傍題でしょうか？『花』と『葉桜』の中間のような気もいたします。これからも使つてよろしいでしょうか」ということが通信欄に書かれてあつた。花（桜）が散つて葉が出てくることを『花は葉に』と表現することはよくある。傍題には載つてないが、もし名句があつたり、季題、或いは傍題にする必要があるれば歳時記の改定の時に新季題候補として取り上げたいと思う。しかし、『花』自体が大きな季題となつているので、別個に立てる必要があるかどうか議論されるであらう。

先日、ある句会で「良夜」という兼題があつた。色んな名句がある中で、「老人の行きつ戻りつ良夜かな」という句が清記されてあつた。どなたかを選んで披講された。作者の名乗りが無かつた。何度か披講されたが返事がない。ふと、私が出した句の「考への行きつ戻りつ良夜かな」と、中七下五が同じなのに気が付いて、もしかしたらと申し上げた。「考へ」が「老人」として清記されたのであるうと気がついた。私の「考への……」を書く時に辞書を引いて、送り仮名の「へ……」を確かめたのも思い出した。私の字が乱暴だつたに違いない。投句する時、清記する時、短い詩である俳句の落とし穴がそこにはあつたのである。清記者だけの責任にするわけにはいかない。俳句は短い詩であるから、短冊に書くときには字を楷書でしっかり読みやすく書くようにしなければと思つた。

句日記 汀子

平成二十七年一月三日 菅屋ホトギス会

初富士と思へば空路新しく積る雪とはゆるなにも簡単にたちまちに消ゆる雪とは思へども初句会てふことどこか改る

一月四日 下朗句会

初句会とて挨拶の改る読初にしたき一書と決めてをり雑煮もて祝ふことより会となる病む友の消息二三初句会たちまちに消えたる雪の消息も

一月四日 淡路島永田青嵐顕彰俳句大会に

大会の日を近づけて日脚伸ぶ春浅くとも明るさをとどむ島波音の中にも香りで野水仙

一月五日 ロイヤル俳壇

乗初や愛車は整備万端に怪我癒えてなほ帯結へぬ春著かな二十年昨日の如く年迎ふ命ある限り乗初つづけたし

一月八日 清交社

潮風に耐へて咲き継ぐ福寿草冬薔薇を抱きたるより誕生日年賀のふことにいつもの会となる語らばや十二通りの正月を語り継ぐ白みそ雑煮なる我が家乗初や案外空いて高速路

一月九日 工業倶楽部

風花と見る間に積り来たりけり

気にかかる雪の消息上京す乗初やハンドル景さばき丁寧に

一月十二日 淡路島百景に詠む

臘夜や悲劇の帝偲ぶ森

一月十三日 大阪倶楽部

寒月の澄み渡る空ありにけり墨選び筆選ぶより書初す探しものばかりしてをり松の内書初としての緊張ありにけりふり返りつつ待春の心あり

一月十三日 綿業倶楽部

初旅は五年に一度富士の辺に切符買ふより初旅となりしこと又逢ひてふたたびみたび御慶かな速き娘に御慶の電話つながりぬ稿債を御慶と共に渡さるる

一月十六日 アネモネ句会

初夢もなく目覚めよきこと淋し初夢や話辻棲合はぬまま青春を忘れたるよりよき目覚め

一月十七日 偲会ホテル・マウント富士

餅花に触れて出入りをする勿れわが命あるがままなる去年今年

一月十八日 偲会 二日句

雪雲の脱いで外に出てしまひけり雪雲のみるみる富士を隠しけり雪山に雲の去来を問ふことも

雪の富士夜明を語ることばなく

一月二十日 有恒俳句会

大寒や庭つぎに声をかけもして若き日のつづきの如くうたかるた初旅の富士になごりのありにけり大寒といへど快晴なりしこと新年の心となりてをりし会

一月二十日 無名会

日脚伸ぶこれより稿を起さばや稿債に日脚の伸びしこと味方待春の旅路の果にある家路

一月二十一日 夏潮句会

大寒といふ一日を心して

一月二十二日 きざらぎ会

灰神楽浴びてとんどの終りけり

一月三十日 時雨句会

汁粉とも善哉かとも初句会夕方は雨と聞きつつとんど終ふ友病みて今年のとんど淋しめる

初旅の富士快晴の朝かな

東京に雨の寄せ植系福寿草

印象の消えぬ初富士なりしこと

福寿草大地を割りて色ほどく

咲き終りたるは地に置く寒牡丹

凍蝶に風の素通りしてゆきし

気がつきしとき日脚の伸びしこと

稿債や心安らぐ寒牡丹

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十七年一月三日 芦屋ホトトギス会

新年会 芦屋ホトトギスの後で
六花大都市に色生れゆく
大雪を発ちて 芦屋の雪に着く
青々と蒼々と 初富士の白

一月四日 野分会芦屋例会

竹馬の一メートルといふ俯瞰
賀状来て 繕りを戻せし二人かな

一月八日 土筆会

寒紅をさして 妻の座守りけり
侘助の咲いて 狭庭に色生るる
寒紅の揃ひて よりの句座となる
一輪の侘助に 座の畏まる
寒紅を引いて 美魔女の出来上る

一月九日 「天地」新年会祝句

去年今年二十年てふ 光陰に

一月十一日 野分会東京例会

竹馬の列につき ゆく三輪車
賀状来て 昨日を遠くしてをりぬ
賀状受くし しみじみと地震二十年

一月十一日 朝日カルチャー若草句会

初空を統べて 飛び立つ一飛機
猫に食はせたき 初夢でありにけり
初雀天使の 如く舞ひ降りて

転がるといふめでたさも 初雀
一月十五日 「俳句さく咲く」収録

猫の手が伸びて 終りし 福笑

一月十五日 登高会

早朝の 雪搔三菱地所社員
沖繩の 待春陸奥の 待春
侘助に 茶室の 空気改る
ラッセル車鏝のごとく 現はるる
侘助の一輪湯気に 揺れ初むる
春を待つ 新幹線の 発車ベル

一月十七、十八日 高濱岸尾先生を偲ぶ初句会

時止まるやうに 凍湖となつてをり
風花に 仕上げられゆく 富士の空
富士よりの 風に 氷柱の 尖りゆく
名水を 歪め 寒鯉餌を 漁る
寒月と 存問したる 富士孤高
雪の富士 黓塗り替へてゆく 日の出
地震語り 年尾語りて 春を待つ

一月十八日、十九日 年寿会

春隣 パンツの 縁切れぬ会
水仙の 白は アロエが 引き立てて
水仙の 香に 鳥歌ふ人 詠ふ
水仙の 香の 傾れ来る 斜面かな
亜米利加の 対岸に 立ち春を待つ
大寒を 明日に 控へてこの 陽気

一月二十一日 蕉心会

避寒 宿戻り これでもか と仕事
ほなやろか 二十日 正月過ぎたから

ハンバーグ 店悴んで 来し 遅さ
すつきりとし 過ぎて 寒の館の 庭
代読は やつぱ 好つきやねん 初句会

万両の高さに 館の 道標

寒の空 ぼつかり 空いて 館の 庭
冬枯も 賑はひ 芭蕉記念館

一月二十二日 北國文芸選者吟

日を 浴びて 氷柱の 細りゆく 早さ
一月二十二日 ひとり文芸ミュージカル「静」に寄せて
静かなる 闘志も 二月 礼者かな

一月二十七日 若水句会

観世の 動宝生の 静能 始
風花や 館の 産声 上げし 日も
源次郎 丹波篠山 能 始
風花の ほんたうは お日様 嫌ひ
小豆粥餅は 二つと 決めてをり
地頭を 代々 務め 能 始
風花や 越後の 友の 便りとも

一月二十八日 目黒学園句会

春を待つ ビルの 谷間といふ 死角
春を待つ 人の 吐き出す 山手線
三井寺の 鐘 悴んでをりにけり
猫の 耳ぴくと 動きて 春を待つ
理髪店 一歩 出るより 悴める

一月三十日 梅花祭選者吟

梯の 又新しく 梅に 佇つ
一月三十日 カトリック新聞選者吟
司祭館 一室 灯る 聖夜かな

雑詠 廣太郎 選

手のひらを零れ蛩の夜へもどる 渋川 山本素竹
 蟻消えて跡形もなき骸かな 同
 すねの毛をかきわけてゆく庭の蟻 同
 晴れてゆく風の軽さに雪加啼く 行橋 進 峰月
 星座には手の届きさう闇涼し 同
 高原の風にみがかれ銀河濃し 同
 滴りを絞り出したる巖かな 米子 中村襄介
 緑蔭の本の頁を風ひらく 同
 森の闇切り取つてくる揚羽蝶 同
 生と死の境突然一葉落つ 松山 中野匡子
 死に化粧母生き生きとして晩夏 同
 露けくも知り人多き来世とも 同
 妹は兄の手火花見るばかり 芦屋 黒川悦子
 聞くとなく軒の風鈴きいてをり 同
 日かげれば秋の表情みせる街 同
 蝸や初学の頃の六甲に 龍ヶ崎 今橋眞理子
 大門をくぐりて空の秋めける 同
 大寺のタワ一の空も秋めきぬ 同

明王の歪みし口や油照 神戸 山田佳乃
 じりじりと片陰縮む城下町 同
 四百年てふ階を踏む素靴 同
 山に見る海上火花弾け散る 熱海 嶋田一步
 火花終へ星空と海ありにけり 同
 七夕の子の夢宇宙飛んでみし 福山 竹下陶子
 浮輪投げ自信の泳ぎ見せてをり 同
 ハンカチを拵げ下さる坐れとて 同
 甲羅干す亀万年の秋思かな 東京 橋本くに彦
 いまひとつぴりつとしない空の秋 同
 草々の青きに残る暑さかな 同
 秋霖や静けさの膨らんでゆく 香川 湯川 雅
 開かんとする桔梗に雨連打 同
 空つつく噴水を雨つつくかな 同
 闇乱打して乱打して揚火花 熊本 岩岡中正
 高々と火花は祈りにも似たる 同
 火花てふはかなきものを愛しけり 同
 山荘の庭新涼の朝の風 長岡 安原 葉
 鎮魂の花火につづく闇の黙 同
 夜空占むフェニックスてふ大火花 同
 戦艦を造りし湾に子は泳ぎ 神戸 藤井啓子
 この湾に生れし大和や夕焼くる 同
 撫子や母になるてふ娘の手紙 同

雑詠句評(十二月号より)

さい雪・公次・仁義

佳乃・霜衣・一步

くに彦・雅・純也

しげ人・廣太郎

一張羅大立と競走

松本 唐澤春城

気の張る会合か式にいらっしやるところだった。フォーマルスーツ、それも仕立てたばかりの一張羅を着て出掛けた。ところが突然の夕立である。傘はない。一目散に駆け出した作者。上五で言い切り、大立立に襲われるとう緊張感。競走したという若さが見事に表現され、ハラハラした情景が目には浮ぶようである。果して一張羅は無事逃げ切ったのか、それとも水も滴るいい×××になったのだろうか。(さい雪)

筆者が遭遇した夕立でかなり悲惨だったものの一つとして、それまでは雲も無く夏空が広がっていたのが、遠くに入道雲が現れたと思ったら、みるみる空が暗くなり、ほんの五分で「大立立」

となった。その時一張羅であったかは記憶にないが、正にこの句は実感がひしひしと伝わってくる。(廣太郎)

西瓜切るとはああ切つてかう切つて

神戸 後藤立夫

西瓜の切り方とは大凡手順が決まっているようである。先ず蔓の元の所から縦に真二つに切る。さらにそれを厚さによって幾つかの半月型に切り分ける。西瓜を食べている様子と言えば、先ず思い浮かべるのは、この半月型にかぶりついている図であろう。さらには、この半月型を、扇の形に切り分ける向きもある。掲句は、今まさに切らんとする西瓜の前に、前段に述べた手順と言ったようなことを、あらためて確認している様子を描いたものである。たかが西瓜、されど西瓜。切り方を誤まっては味が台無し。切り方にこだわっている作者の心理がうかがえて面白い。(公次)

よく漫画などで、大きな「西瓜」を縦に四分の一ほどに切つたスタイルを見る事があるが、実際には結構小さく、子供が持つて食べるのに丁度良い大きさに切つた形が主流なのではないだろうか。何か切る前に大きな丸ごとの西瓜を見ながらあれこれ切る形を思案しているユニークな姿が想像出来る。(廣太郎)へ以下略

天地有情

江戸選

香水に心を見せぬ女かな 福山 竹下陶子
 乾坤に無限の詩あり鳥渡る 同
 蝌蚪生れて池に秩序の生れけり 東京 稲畑廣太郎
 待つ心とはみよし野の初桜 同
 盆僧は何と九歳なりしかな 長岡 安原 葉
 新盆も過ぎて淋しさいや増せり 同
 新涼や足音坂を下りてくる 東京 今井千鶴子
 朝ごとどころ掃かれ散芙蓉 同
 星降るといふ七夕を心待ち 神戸 後藤比奈夫
 星見えぬ夜は鵲の橋危な 同
 悩むよりばつと昼寝をするもよし 東京 河野美奇
 うたたねはしても昼寝の暇はなし 同
 初萩のよべの雨滴でありにけり 宝塚 水田むつみ
 雨止めばどこからとなく秋の蝶 同
 日本の暑さへ到着口を出る 大阪 佐土井智津子
 搭乗の人のうしろに旅の秋 同
 冷酒や虚子を語つて終りなし 神戸 浜崎素粒子
 虚子のことばかり話して明易し 同

騒ぎとは西瓜が井戸に落ちしこと 同 三村純也
 ほそぼそと鉦鳴り続け地藏盆 同
 城を見て踊れと郡上踊唄 同 後藤立夫
 をとり鮎とはいへさすが郡上鮎 同
 民草といふことばあり終戦忌 熊本 岩岡中正
 その人の精霊舟として質素 同
 ひとたびは白を極めて酔芙蓉 龍ヶ崎 今橋真理子
 新涼の色をたたへて山湖あり 同
 鷺草の飛翔の夢を抱く蕾 神戸 千原叡子
 百人の往けば道出来大夏野 同
 秋の人いつも静かに笑ひぬる 群馬 中杉隆世
 霧となり烟となつてをりにけり 同
 雨の萩蝶の宿つてをりにけり 奈良 古賀しづれ
 俳諧の雨に濡れゆく萩の道 同
 大櫛 一木にして大緑蔭 吹田 大橋 暁
 夏空に十八本の椰子の花 同
 水澄みて嘘のつけない水となる 神戸 和田華凜
 虫の声闇を揺らしてをりにけり 同

法師 蟬

稲畑汀子

秋の吟行会はまだ残暑の厳しい頃であった。場所は稲城の妙見寺その近辺とある。

もしかしたらあの句碑があるお寺かしら、と思いつながらその日がくるのを待っていた。

もう、何年前になるであろうか、虚子の曾遊地である多摩の横山のこの地、妙見寺に私の句碑を建てて頂いたのである。ここは今も武蔵野の名残をとどめ、周りの山々は緑が深く生い茂り、ひっそりした佇まいであった。昔、虚子が訪ねた時はこの寺の住職は留守だったという。開けつ放しになっていた寺に上がって、虚子は待たせてもらうことにしたのであるうか。そこで虚子は昼寝をしたそうである。

私はその話を元に次の句を作った。

住職の留守に昼寝をせしは虚子 汀子

間もなくこの句をお寺の境内に句碑にするから揮毫せよとお達

しがあり、早速、半折に書いて送った。

その句碑の除幕式には稲城の俳人を始め各地から大勢集まり、盛大に開催された。廣太郎一家、孫たちもまだ小さかった。

虚子が好んだ縦長の句碑に深く彫られた字が馴染んでいた。

「いい句碑が出来ましたね」

側に来て声を掛けて下さった小林草吾さんもすでに鬼籍の人に なってしまわれた。

吟行会前日、日航の102便で上京し、その日は朝日俳壇の選句を終え、ある夕食会の会場のプリンスホテルの三十三階からの夜景を見ながら、この句碑のことを考えていた。句碑の周りに咲いていた花が思い出せなかった。句碑の他はがらんとした境内であつたように記憶している。

東京で運転を頼んでいる福井さんは、前に行つたことがあるからと言ってくれていて安心だった。途中の高速道路の渋滞も案外簡単に抜け、標識に沿って高速を降りると、街中に梨畑が散見されるようになって稲城の街になったことが分つた。

会場近くで河野美奇さんと出会い妙見寺へ誘つた。

「もう行つてまいりましたがご一緒しましょう」

「くねくねと曲つていて行く道が難しいお寺ですね」

「先生の句碑、すっかり馴染んでよくなっていますよ。」

「あら、そうですか。楽しみですな」

同じ道を通っているような錯覚を感じながら妙見寺の山門に着いた。

「そうだ。ここだわ」

鄙びた雰囲気がある昔の印象を繋いでくれた。車を降りると法師蟬の声に包まれてしまった。今年初めて聞く秋の蟬である。

境内には様々な秋草が咲き乱れている中で女郎花が目立っていた。大きな蓮の花も咲き残っている。頬被りの上に麦わら帽子を被って水をバケツに汲んでいる人が今の住職であろうか、近づいて挨拶をした。

「稲畑でございます。祖父がお訪ねした時は住職がお留守だったようですが、今日はおいでになるので私はお昼寝が出来ません」

「ははは、その様ですね」

「句碑が建ったあと、初めてお伺い致します。草花が沢山育つて、いい境内でございますね」

次々句会に参加する方達が来られ挨拶される。少し芝生を踏むようにして句碑に近づいた。思っていたよりも句碑は低く感じるが、字の彫りも深く、落ちついた佇まいが境内を締めているように見えた。

「冷えたお茶を用意しております。どうぞ召し上がって下さい」

本堂の縁に沢山の茶碗がお盆に乗せられ、大きなジャーに冷たいお茶が用意され、住職の奥様が勧めて下さるのを各自注ぎいれ

ては頂いていた。

境内続きに深い山があり、その山に守られるように句碑が建っている。「……せしは虚子」という字が深くはつきり彫られているのが遠くから目立ち、まるで虚子の俳句かと思紛うのが面白いのである。私の名前はその左下にひっそりと書かれてある。

オーシツクツク、オーシツクツク。法師蟬がその句碑を包み込むように一頻り鳴き募った。

